

氏 名 ・ 本 籍	中西 尋子（大阪府）
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	乙第 44 号
学位授与の日付	平成 30 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当者
論 文 題 目	韓国キリスト教およびキリスト教系新宗教の日本 宣教—宗教から見る日韓関係—
審 査 委 員	（主査） 教 授 谷 富夫
	（副査） 教 授 菅 康弘
	（副査） 教 授 松川 恭子
	（副査） 教 授 川端 亮

論文内容の要旨

元来日本はキリスト教が根づきにくい国である。そうした状況にありながら、韓国出自のキリスト教会が日本で宣教を展開し、日本在住の韓国人のみならず、日本人信者も一定程度獲得している事例が見られる。在日大韓基督教会（1908 年創立）、統一教会（1954 年創立）および「韓国系キリスト教会」（1990 年代以降来日）である。本論文の課題は、これらがどのように日本宣教を行い、信者を獲得しているかを問うことにある。

従来の宗教社会学は、これら 3 教会を別個に性格づけてきた。在日大韓基督教会は「在日の宗教」、韓国系キリスト教会は「ニューカマーの宗教」、統一教会は「反社会的宗教」として。確かにそうなのだが、3 者を同じ俎上に乗せることによって新たに見えてくるものがある。申請者の狙いはここにある。

本論文は、以上の問題設定に加えて調査概要、概念枠組みなどを提示する序章に続き、全 3 部 12 章および結章で構成されている。

第 I 部「在日大韓基督教会—民族の教会として」では、第 1 章「民族の教会としての教会形成—在日大韓基督教会を事例として」で、教団機関紙『福音新聞』（1951 年創刊）の内容分析を行い、在日大韓基督教会の民族主義的性格を明らかにする。植民地支配下の朝鮮半島から日本に来た人々が受けた差別に向き合う教会の姿勢が鮮明である。

第 2 章「一世にとっての教会、二世にとっての教会」では、在日一世にとっては教会が日本での厳しい暮らしに耐えるための民族共同体であったのに対して、二世にとってはエスニック・アイデンティティの獲得の場であることを、信者の生活史から明らかにする。

第3章「在日大韓基督教会と韓国系キリスト教の日本宣教のあり方を比較して」は、在日大韓基督教会と韓国系キリスト教会の間に日本人信者の獲得で差があることを、教会での使用言語や民族主義的色合いの有無から説明する。

第4章「韓国系キリスト教会の在日大韓基督教会への加入」では、在日同胞の教団として日本に定着した在日大韓基督教会だったが、現在は牧師の3分の2が韓国の教団から派遣されていること、および、1980年代以降、韓国系キリスト教会が在日大韓基督教会に加入するケースが増えてきたことから、両者がボーダーレスの関係になりつつある現状を報告する。

第Ⅱ部「韓国系キリスト教会群一普遍主義のもとに」は、日本の植民地支配という日韓関係の「負の歴史」を乗り越えて、日本人宣教を精力的に行う韓国系キリスト教会がテーマである。まず、第5章「日本における韓国系キリスト教会の概要」で、これまであまり知られていなかった韓国系キリスト教会の全体像を明らかにする。データソースに『クリスチャン情報ブック』（2010年版）を用いて、当該教会が大都市圏だけでなく38都道府県に分布し、推計300近くもあることをつきとめた。また、1990年前後から2000年代前半にかけての設立が全体の81%にのぼることがわかった。

続く第6章「韓国人宣教師にとっての日本宣教—『汝の敵』『隣り人』としての日本」は、韓国系キリスト教会が活発な日本宣教を行う要因の考察である。キリスト教人口が25%の韓国では牧師が供給過剰であり、それが海外宣教の構造的要因となっている。だが、それだけでは盛んな日本宣教を十分に説明することはできない。韓国では儒教道徳がエートスとして国民の間に深く浸透している。ここで「儒教道徳」とは、ものごとを道徳的な上下関係に位置づける思考様式のことを言うが、これを韓国系キリスト教会も共有していた。韓国人宣教師にとって日本は韓国を侵略した道徳的に劣った国である。しかし、そうした恩讐を越えて日本人に福音を伝える崇高な使命として日本宣教が意味づけられていることを、牧師の語りから明らかにする。

第7章「なぜ日本人が韓国系キリスト教会の信者になるのか」は、日本人が信者になる教化過程の考察である。教会には「7週の学び」、「小グループ（筈）」、「Quiet Time」、など、学びのプログラムが用意されている。新来者はこのプログラムに沿って信仰を強化していくが、この点で日本の教会に物足りなさを感じる人が韓国系キリスト教会にアプローチしている場合が少なくないことを、本章は明らかにする。

第Ⅲ部「統一教会—建前の普遍主義、本音の民族主義」、第8章「韓国社会と統一教会」では次の諸点が明らかになる。第1に、統一教会の性格が韓国と日本では大きく異なっている。韓国の統一教会は宗教団体を越えて巨大な事業体である。第2に、合同結婚式で韓国人と結婚し、韓国に暮らす日本人女性が現在、7千人いることが韓国と日本の統計データから明らかになる。第3に、統一教会による韓国人男性と日本人女性のカップリングが韓国で許容される背後には、韓国農村における男性の結婚難や、男性の非正規雇用率の異常な高さといった社会構造の歪みがある。

第9章「日韓両国における統一教会のあり方の差異—新聞報道の比較から見える

こと」では、『朝日新聞』と『朝鮮日報』の統一教会関連記事を分析し、両国における統一教会のあり方を比較する。日本では靈感商法が 1980 年代後半から社会問題化した。『朝日新聞』にはその提訴、判決などの記事が多数見られる一方、『朝鮮日報』にはそのような記事は一切なく、統一教会や教祖の動向、および傘下の関連企業などの記事が多く見られた。統一教会の活動内容が日本と韓国では大きく異なっている。

続く第 10 章と第 11 章のデータソースは、合同結婚式を経て韓国で暮らす日本人女性信者 38 人の語りである。まず第 10 章「在韓日本人信者の信仰生活」では、彼女たちが韓国で暮らすことの意味づけを明らかにする。教団が決めた韓国人男性と愛情のない結婚をし子供を産むのは、日本の植民地支配を贖罪し、国境と民族を超えた「地上天国」を建設するためだと、彼女たちは語るのだった。

次いで、第 11 章「統一教会への入信—『女性性』の回復」は、日本人女性信者たちが統一教会に入信し、結婚に至る背後経験の考察である。日本で彼女たちは、結婚と家庭に関して深刻な絶望体験を持ち、職業経験からも「女は損」という感情を抱いていた。女性であることに積極的な意味を見出せない状況で、統一教会に救済を求めていた。そして統一教会で結婚し、子どもを産み育てることに宗教的な意義を見出すことによって女性性を回復できたと、彼女たちは信じている。

第 12 章「『本郷人』に見る祝福家庭の理想と現実」は、統一教会が発行する在韓日本人信者向けの機関紙『本郷人』の内容分析である。分析の目的は、1 つに申請者の調査対象者を相対化すること、2 つに教団が在韓日本人信者に伝えようとしているメッセージの解読である。調査対象者たちは現地で比較的平穏無事に暮らしていた。しかし『本郷人』の記事からは夫や子どもの問題、病気、生活苦などで問題を抱える信者が少なくないことがわかる。また、『本郷人』には教団の行事と、そこで語られる教祖や幹部の言葉がつねに掲載されている。それは、日々の生活で精一杯な信者に対し、初心忘れることなく、統一教会の信者として使命を遂行せよというメッセージであった。機関誌『本郷人』は、統一教会の思考の枠組みを維持・強化させる機能を果たしていた。

結章「日韓関係を背景にした三者三様の宣教」では、第 1 章から第 12 章までの知見をまとめ、3 教会の日本宣教が日韓関係の「負の歴史」を背景に展開されてきたことを確認する。在日大韓基督教会の場合は、戦前の植民地から日本に渡った同胞を対象に宣教を始めた。そして戦後は、同胞の人権問題に積極的に関与することによって民族主義的な性格を強めていった。韓国系キリスト教会の場合は、負の日韓関係を倫理的な上下関係に置き直して宣教を展開する。宣教師にとって日本は「傷ついた隣人」であり、彼らはその隣人を助ける「よきサマリヤ人」の使命感をもって行動している。そして統一教会によれば、日本は朝鮮半島を植民地支配した罪深い国である。日本は贖罪のために韓国にできる限りの人的・財的協力をする事は当然である。こうした信仰を内面化した日本人女性がすすんで韓国人と結婚し、韓国で家庭を営んでいる。

以上のように、韓国出自の 3 教会は近代日韓関係史をそれぞれの仕方で定義づけることによって日本宣教を可能にしたとすることができるのである。

審査結果の要旨

本論文は、2017 年 11 月 15 日の人文科学研究科委員会において受理された。学力確認のための試験は、同年 11 月 29 日の人文科学研究科委員会において「甲南大学学位規程」第 13 条第 3 項を適用し、その全部を省略することが承認された。最終試験は同年 12 月 25 日に、公開講演会は 2018 年 1 月 6 日に、それぞれ実施された。

近現代の日本社会で一定規模の信者を獲得している韓国系宗教は多岐にわたる。制度化されていないシャーマニズム系や仏教系の民間信仰は、とくに在日韓国朝鮮人が多い関西圏には一定程度存在し、その社会学的研究は 1980 年代から息長く続けられてきた。それに比して、制度宗教である韓国出自のキリスト教会の研究は少なく、しかも、在日大韓基督教会、「韓国系キリスト教会」、統一教会の 3 教会をそれぞれ異質なものとして扱う傾向があった。これに対して本論文が画期的なのは、これらをあえて横並びに考察することによって、3 教会の体系的把握という新たな地平を切り拓いたことにある。

3 教会の体系的把握とは「韓国併合」が宣教過程に三者三様の形で作用していたことの解明であるが、この探究を可能にしたのは申請者の真摯な実証的研究態度であった。申請者の調査方法は内容分析とインタビュー調査に大別できるが、それぞれの徹底ぶりには目を瞠るものがある。たとえば、第 I 部の在日大韓基督教会の研究では教団機関誌『福音新聞』の現在閲覧可能な第 318 号（1976 年）から第 721 号（2013 年）まで、約 40 年間の記事をすべて分析している。また、第 II 部の韓国系キリスト教会の研究では、1300 ページの『クリスチャン情報ブック』に分け入って韓国系教会群の全体像を描き出すという基礎的作業から研究を積み上げている。そして、第 III 部の統一教会に至っては、『朝日新聞』と『朝鮮日報』の 1955 年から 2006 年までの関連記事の見出しと本文をすべて検索し、比較可能な一覧表にまとめた。インタビュー調査に関しても、それぞれの教会で職能者と信者に詳細なインタビューを行っているが、とくに統一教会の在韓日本人信者 38 人から生活史を聞き取った単独調査は他に例がないであろう。こうした分厚いデータが、申請者の斬新な主張に説得力を持たせている。加えて、秀でた韓国語の運用能力も申請者の強みである。

ところで、別の角度から韓国出自のキリスト教会の研究意義を評価するならば、それが「生きた宗教」として、活性化して信仰されている点である。申請者の問題関心の底にはキリスト教がなかなか根づかない日本で、なぜ西欧出自ではなく、韓国出自のキリスト教が信者を獲得できるのか、という問いがある。今回の研究を通じて、この問いの解明に一歩近づいたようである。第 7 章で、韓国系キリスト教会にはあって、既存の教会にはないとされる「学びのプログラム」が、日本人信者の獲得に有効であったことを明らかにしている。また、第 11 章では、統一教会の日本人女性信者が韓国人男性との結婚・出産を、かつての植民地支配の「贖罪」と意味づける背後には、家族と職場での深刻な挫折体験があったことが示唆されていた。社会生活における深刻な挫折体験と、きわめて特異な世界観の受容とを結びつける

には、なおいくつかの媒介要因が必要と思われるが、そうしたアプローチを可能にする糸口は見出されたと言えよう。

もう1点、今後の課題たりうる点を指摘すれば、本論文は韓国から日本に渡来したキリスト教を扱っていた。これを韓国社会に埋め戻すことによって、新たな視界が開けるのではないか。韓国では霊性を重んじるシャーマニスティックな教会、社会運動を志向する教会、そして日本に来るような福音主義的な教会や、統一教会のような新宗教と、多種多様なキリスト教が展開している。同じ東アジア圏にあって、キリスト教の盛んな韓国と、そうではない日本との比較宗教社会学を可能にする有利な地点に申請者は立っている。このことを自覚して、いっそう大きな課題に挑まれることを期待したい。

以上、本論文は、韓国出自の3教会を横並びに考察するという斬新なアイディアと、約20年の歳月を費やした独自の社会調査のなかから実証的に生みだされた、きわめて独創的な研究成果ということができる。

2017年12月25日に実施された最終試験においては、本論文の目的、方法、結果、および今後の課題について活発な質疑応答が行われた。議論は、外来宗教の「土着化」の概念の吟味、韓国の儒教倫理とキリスト教の関係、韓国キリスト教とナショナリズム、さらには統一教会の在韓日本人信者と日本国内の日本人信者との比較や、韓国から日本へ来たキリスト教と日本から韓国へ渡った新宗教との比較の問題など多岐にわたったが、それらに対する論者の応答は的確であり、当該研究課題に関する学識を確認できた。最終試験の結果は、きわめて良好であった。

以上の結果により、審査委員は一致して、本論文が博士（社会学）（甲南大学）の学位にふさわしい業績であることを認めるものである。